

韓国における「結婚」の揺らぎと子育て

○愛知教育大学 山根真理
江原大学校 李京姫
嶺南大学校 洪上旭
昌原文星大学校 吳貞玉
岡山大学 李璟媛

1 目的

本報告の目的は「結婚の揺らぎ」にかかわる諸現象を焦点にして、現代韓国における子育てをめぐるジェンダー関係と社会的ネットワークにかんする考察を行うことである。

2 方法

韓国の大邱市、昌原市、春川市で2013年8月および2014年3月に、未就学児の保護者を対象にして計12ケースのインタビューを実施した。方法は半構造化インタビューである。インタビューは11ケースが子どもの母親、1ケースが子どもの母親と父親である。母親の年齢は30代が10名、20代と40代が1名ずつ、子ども数は、2人が9名、1人が3名である。世帯形態は、夫婦同居核家族が10ケース、夫方両親同居の3世代家族が1ケース、離別ひとり親家族が1ケースである。母親の就労状況は、専業主婦が2ケース、正規雇用者が7ケース、非正規雇用者が2ケース、自営業者が1ケースである。本報告では一人親と国際結婚のケースを中心に考察する。

3 結果

ジェンダー関係と子育てネットワークに注目した2ケースの概要は、以下の通りである。

(1) 一人親のケース

2012年に離婚して二人の娘と「母子園」に住んでいる。結婚・出産を機に仕事をやめ、上の子が三歳になってから仕事（非正規）を始めた。現在も非正規の会社員をしている。結婚時は夫の父母と同居していた。子どもを連れて家を出て兄の住む地域に移った。協議離婚が成立せず裁判離婚をした。現在の居住地に移ったのは離婚後のことである。現在の育児援助は、国家の援助（実体的援助）、職場の同僚（情動的、情緒的援助）、インターネット（情動的援助）から得ている。

(2) 国際結婚のケース

ベトナム出身の妻と韓国人男性のカップル。2008年に結婚した。夫が14歳年上である。世帯構成は、夫婦と娘、夫方両親、夫の弟の6人である。夫は屋台の店をやっており妻も手伝っている。2011年に妻は韓国国籍をとった。家事は姑と協力して、子どもの世話は妻がやっている。育児援助ネットワークは姑と福祉（多文化家庭センター）が中心である。インターネットを活用するなどして外国から来た人をサポートする「奉仕活動」を行っている。

4 結論

2ケースの検討から、現代韓国における「結婚の揺らぎ」とジェンダー関係、社会的ネットワークにかんして、以下の仮説が考えられる。①離婚は女性の地理的移動と福祉のサポートを得たネットワークの再編成をもたらす。②東南アジア諸社会からの女性の結婚移動は女性にとって、夫方中心の親族ネットワークの中で生きる異文化経験と、韓国社会への社会・文化的同化をもたらす。しかし、福祉やインターネットを契機にした多文化的ネットワークの形成過程も存在する。

先行研究との対話と、インタビューを積み重ねることで仮説を鍛えることが課題である。

※本報告は「平成24～26年度科学研究費補助金基盤研究(C)課題番号：24530620 研究課題：子育て・子育てのジェンダー関係とネットワークの日韓比較：多様化と格差拡大の中で（研究代表者：山根真理）」による研究成果の一部である。